

公認会計士短答式試験 自己成績の分析

2012年7月22日

原告 島崎 崇

年度	合格点	推定平均点	自己得点	推定位置	自己倍率	Z値	倍率/2	Z値
2006	69.0	62.56	-	-	-	-	-	-
2007	65.0	52.76	-	-	-	-	-	-
2008	65.0	54.37	57.2	41.95%	2.384	-1.876	-	-
2009	70.0	54.91	58.2	40.60%	2.463	-1.774	-	-
2010 I	71.0	52.68	57.6	36.11%	2.769	-1.382	1.385	-3.157
2010 II	71.0	47.48	68.2	6.95%	14.389	13.512	7.194	4.290
2011 I	73.0	55.72	71.0	12.77%	7.829	5.104	3.914	0.086
2011 II	73.0	47.67	71.0	4.76%	21.028	22.023	10.514	8.545

推定平均点は、模試などのデータを独自に調査し、その結果を参考にして算出したものである。

推定位置は、受験者全体に於ける上位からの位置を表している。

自己倍率は、推定位置の逆数である。

Z値は、1995年～2008年の合格倍率の平均値3.847、標準偏差0.780に基づいて、自己倍率のZ値を求めたものである。

合格点のデータは、公認会計士・監査審査会がウェブサイト (<http://www.fsa.go.jp/cpaaob/>) で公表している、毎回の「公認会計士短答式試験の合格発表について」に基づいている。尚、原告は受験していないが、2006年及び2007年についても、合格点が公表されているので、参考のために表中に掲載した。

原告は、毎回の短答式試験に於いて、問題用紙に解答した番号を記入しておいた(甲10号証の1)。このため、各問題の正解が公表されたとき、自己採点することができた。原告は、2010年第Ⅱ回の短答式試験では、68.2点(推定で受験者の上位6.95%の得点)をマークした(甲10号証の2)。そして、2011年第Ⅰ回は71.0点(推定で上位12.77%)、又2011年第Ⅱ回には71.0点(推定で上位4.76%)に位置していた(甲10号証の3,4)。原告は、後に、公認会計士・監査審査会に対して個人情報の開示請求を行い、実際の得点が、全て上記自己採点の得点と同じであることを確認している(甲11号証の1~4)。このため、仮に、従前の20%~30%程度の合格率であれば、原告は既に3回合格していたことになる。又、仮に2010年から年二回の試験になったことを考慮して、半分の10%~15%程度の合格率を想定した場合でも、原告は少なくとも2回合格していたことになる。

自己倍率のZ値から、原告の合格可能性を計算することができる。例えば、2008年短答式試験での原告の合格可能性は、 $P(Z < -1.876) = 0.03030$ より、僅か3%であり、合格の見込みは殆どなかったと言える。

しかし、2010年第Ⅱ回から2011年第Ⅱ回にかけての3回の試験では、Z値が異常に高い値を示している。この3回のうちで最も低い2011年第Ⅰ回でも、 $Z = 5.104$ と、極めて高い値である。 $P(Z < 5.104) = 0.9999998337$ であるから、原告の71.0点という点数では、100万分の99万9999を上回る可能性で合格していたはずである。それが不合格になった。他の2回に至っては、 $Z = 13.512$ 及び $Z = 22.023$ と、途方もない数値を記録している。このZ値で合格しないことは、絶対がない。

